図書館友の会だより
# みみずくの森
第11号

2023年10月
七尾市立図書館
友の会発行
発行責任者
芹田玲子

## 「子供たちが大喜びだった」

### 図書館まつり反省会で意見出しあう

七月二日、図書館まつりは盛況のうちに終わりました。ご協力ありがとうございました。まつり終了後、関係者一六名による反省会をひらき意見を出し合いました。

**【本のバザール】**売上は二万円（内訳＝単行本一〇九冊、文庫一〇三冊、他一一九冊）「単行本一冊、文庫本三冊いずれも百円で買いやすかったのではないか」「消毒済み！のポップも安心感を与えていた」。

**【紙ひこうき】**一二名参加、「子供たちが大喜びだった」「なかなかできない子もいた」「終わったあとに、もういちど作らせたのが良かった」「来年もやったら良い」。

**【スタンプラリー】**四九名参加。「絵本センターで靴を脱ぐのが不便で混雑した」

**【伝承あそび】**子供一〇〇名、大人四一名参加。「けん玉、竹おじゃみ、だるま落とし、一つ一つの場所にけっこう長くいて楽しんでくれた」

**【しびびの会人形劇】**大人子供あわせて三一名参加。「声を張り上げなくても良かった。以前は隣の部屋からのショー音楽と客の出入りの音に影響されたから」（出演者の感想）「観客人数にちょうど良い距離だった」「伝承遊びの担当の人たちも見ることができた」（会場が同じ絵本コーナーなので移りやすかった）

**【その他】**「昔のように、法被を着ればもっと盛りあがったのでは」「もう少しメディア（広報）など活用をしたら良い」「事前の周知が不足していた」「もし大雨警報が出たら祭りは中止になるのだろうか。その時の連絡方法はどうする」「コーヒーと音楽のコーナーを再開して欲しい声もあった」「万一に備えてAED（自動体外式除細動器）の使い方も知っておきたい」。

＊いただいた意見は次回に生かして行きます。

## 定員に達しました

日帰りバスの旅
**ふるさと散歩**
**「漆の里を訪ねて」**

十月十八日に輪島方面をめぐる「ふるさと散歩」は募集定員に達しました。ご応募ありがとうございます。今回は友の会の独自企画なので定員二十一名の中型バスにさせて頂きました。また万が一に備え参加費から旅行保険にも加入いたします。

蛇足ですが旅行当日は服用薬・マスクなど、お忘れの無いように。

ふくべの大滝　　撮影／寺野時雄

## 本の虫

気づくと四時間がたっていた。美術館滞在最長記録である。富山市に私の故郷・宇和島のネオンが立っていると聞いて、観に来た大竹伸朗展▼入館直後「何なんだ、これは!?」の連続だった。大竹さんいわく「自分もわかってない。わけわかんない、が許されているのがアート」。安心した。私もわからなくていいんだな。そこで本を再読するように、もう一巡りし、堪能する▼大竹さんのほとばしる情熱を閉じこめた作品集が並ぶ中、絵本『ジャリおじさん』（福音館書店刊）を見つけた。コラージュのセンスが光る個性的な…　そうか、作者はこの人だったのか▼宇和島を活動拠点とする大竹さんが廃棄の駅名板に赤いネオン管を入れたら大竹伸朗展の看板娘となった。同市図書館には「大竹文庫」も新設されたと聞く▼帰りしな、見あげるとネオンサインの「宇和島駅」は、かつて故郷にあった頃と変わらずに私を見送ってくれていた。（S）

# 響き

室屋　佳子

六月に能「船弁慶」のシテを体験させていただいた。前場は「静御前」、後場は「平知盛の亡霊」の二役である。一人二役は難しい。謡と舞は覚えても、自分の声や体格は変えられないからだ。ところが舞台で変化が起きた。

前場。源義経一行が大物（だいもつ）の浦に到着する。頼朝と不仲になり西国へ逃れるためだ。どこまでも殿（義経）のお供をと願う静の元へ、弁慶が来て言う。「都に戻って待つように」と。弁慶の迫力ある声が響き、「殿に直に返事をしたい」と言う静の声も太くなった。

殿の思いやり溢れる言葉を直に聞き、静は涙をこらえて船出を祝い舞う。烏帽子を被りお囃子の響きを背に受け、私はふと、背筋がすっと伸びていることに気づいた。

後場。知盛の亡霊姿で舞台に出た。船上にいるのはついさっき涙で別れた義経だ。気持ちを切り替え、憎き敵の義経を海に沈めるため稽古どおりに長刀を振る。義経の太刀にかわされ弁慶の祈祷に阻まれ、知盛の無念さを実感すると、いつもより歩幅は広くなり、構えと振りが大きくなった。

終幕。力尽き波間を漂う知盛の背に地謡とお囃子の響きが伝わり、心を鎮めてくれるように感じた。

対面で言葉を交わし刃を交えれば声や動きが変化する。そして地謡とお囃子の響きによって心も変化するのだ。

今後も能楽の響きに親しみ、想いを綴っていきたい。

＊写真は室屋さん演じる「船弁慶」の二場面を撮影したものです。

係では皆さんの投稿を待っています。原稿は図書館窓口までどうぞ。

## この本

# 切手デザイナーの仕事　間部香代　著

グラフィック社刊

「切手デザイナーという職業がある。彼らは日本郵便の社員で、現在8人。普通切手と、1年に約40件発行されている特殊切手――日本の切手は8人でデザインをしている。」この8人の仕事術が紹介されています。

星座の絵を印刷した後に、ホログラム箔（見る角度によって色が変化し、きらきら輝く）を押した「星座シリーズ」。

俯瞰の料理写真、という雑誌の手法を切手にも取り入れた「おいしいにっぽんシリーズ」

日本人には間（ま）の美学がある。「切手にも送る人の気持ちを乗せる余白が必要」と、バックを白にした「おもてなしの花シリーズ」。一つ一つの仕事から、切手の奥の世界が見えてきます。

「星の物語シリーズ」では、満月のホログラムの中に極小のウサギを隠したり、星のなかに「月」や「星」の漢字を入れたり。「遊び心」も切手の大切な要素なのだと知りました。（菊）

この本は七尾市立図書館にあります。